時代に誠実に向き合った学徒
—謝辞にかえて—

学長　秋葉　英則

A Scholar Who Has Faced His Own Times Faithfully
—— To Prof. Emeritus S. Takahama with My Deepest Gratitude ——

Hidenori Akiba

本学名誉教授・高濱介二先生は、昨夏７月、喜寿を迎えられました。

その年の３月まで本学初代の学長職（２期）をおつとめ下さいました。

研究者（学徒）としての55年余にわたるご活躍とそのご努力に敬意を表します。筆者は、先生の喜寿の祝賀会の折、“わしらの財産”ということばを用いて先生のこれまで・これからに想いをはせ、「オメデトウゴザイマス。うれしいのです」と語ったものです。

先生の学問的基盤は社会学です。それ故、大阪教育大学での永年にわたるお仕事は、わが国の教育問題を社会学の切り口で分析し、問題の発展過程を論じる、ということにこだわられました。筆者もまた、先生と同じ職場で仕事をするという幸運にめぐまれたことから、先生とご一緒の共同研究に参加することができました。その多くは、関西、いや東海を含む西日本の教育科学におもいよせている学徒との共同研究でした。

その主なものを記録に残すべく以下に記しておきます。

- 現代教育科学研究会編（1970）『国民のための教育科学』　汐文社
- 教育実践事典刊行委員会編（1982）『教育実践事典（全5巻）』　労働旬報社
- 現代教育科学研究会編（1983）『教育の原理とその展開』　あゆみ出版

この他にもありますが、文字どおり共同研究の醍醐味を経験できた仕事でした。

まさに、時代に誠実に向きあおうとした仲間がそこにおり、その仕事の成就を練りに練って展望を与えて下さった高濱先生がおったからの果実なのです。それだけに、今、読みかえしても“生きている”とおもわせてくれるのです。そうした仕事に参加できたことを宝にしたいとおもいます。

先生、ありがとうございます。

さて、筆者は、またまた縁あって高濱先生の築いてこられた本学の営みをひきつぐことになりました。

責任の重さを痛感しています。

ていねいに引き継ぐことを誓って謝辞にかえさせて頂きます。